第三講 演習問題 一・二・三

一 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。（＊は本文の後に注があることを示す。また、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。）

金粟園後有蓮池二十余畝、臨水有園、楮樹叢生焉。予欲寘一亭納涼。或勧予「①此不材木也、宜伐之而種松柏」。予曰、「松柏成陰最遅、②予安能待。」或曰「種桃李。」予曰、「桃李成陰、亦須四五年。道人之跡如遊雲。安可枳之一処。予期目前可作庇陰者耳。」楮 a 雖不材、不同商丘之木、嗅之狂酲、三日不已者。蓋亦界于材与不材之間者也。以為材、b 則不中梁棟桁櫨之用、以為不材、b 則皮可為紙、子可為薬、可以染繒、可以頮面、其用亦甚夥。

（袁中道「楮亭記」より）

〔注〕
＊金粟園＝筆者の所有する庭園。
＊楮樹＝コウゾ。クワ科の落葉低木。
＊叢生＝群がって生える。
＊寘＝置く。
＊材＝材木として用いることができるもの。
＊道人＝道を求めて修行している人、または道を得た人。
＊跡＝ゆくえ。
＊枳＝ミカン科の落葉灌木（かんぼく）。
＊庇陰＝木陰。
＊商丘之木＝商の丘に生える大木。その形状や性質のため、人間の役に立たない。『荘子』の記述を踏まえる。
＊狂酲＝悪酔いする。
＊界＝境界に存在する。
＊梁棟枅櫨＝家の骨組に用いることのできる材木のこと。
＊頮＝洗う。

問一　二重傍線部ａ・ｂ（ｂは二箇所ある。）の読みを、送り仮名も含めて答えよ。（現代仮名遣いでよい。）

ａ＝

ｂ＝

問二　傍線部①「此」が指すものを、本文中から抜き出せ。

問三　傍線部②「予安能待」を現代語訳せよ。

問四　筆者が「楮樹」を植える理由を二つ挙げよ。

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

王子猷居山陰、夜大雪。眠覚、開室、命酌酒、四望皎然。因起仿偟、詠左思招隠詩。A忽憶戴安道。時戴在剡。即便夜乗小船就之。経宿方至。造門不前而□。人問其故、王曰、「吾本乗興而行、興尽而返。B何必見戴」。

（『世説新語』より。出題の関係上、返り点・送り仮名の一部を省略した）

（注）
王子猷……王徽之。子猷は字。王羲之の第五子。
山陰……地名。会稽郡山陰県。
皎然……白く明らかなさま。
左思……詩人の名。字は太沖。
招隠詩……当時流行した詩の題名。清浄な自然界に隠棲する者へのあこがれを綴ったもの。
戴安道……戴逵。安道は字。隠者。
剡……剡山。現在の浙江省の地名。
経宿……一夜を経て。

問一　傍線部Ａ「忽憶戴安道」とあるが、なぜ戴安道のことを思ったのか。その理由として最適なものを、次の中から選べ。

1　隠者の友人と興をともにしたくなったから。
2　招隠詩の解釈について隠者の友人と議論したくなったから。
3　隠者の友人が酒好きだったことを思い出したから。
4　あまりの大雪に山奥に住む隠者の友人の安否が気遣われたから。
5　隠者の友人が山奥でどんな暮らしをしているのか興味を持っていたから。

問二　空欄□を補う最適な漢字一字を本文中から抜き出せ。

問三　傍線部Ｂ「何必見戴」の書き下し文として最適なものはどれか。次の中から選べ。

1　何（なに）を必ず戴に見せんや
2　何（いづ）れぞ必ず戴と見（まみ）ゆべきは
3　何（いづ）くんぞ必ず戴を見るは
4　何（なん）ぞ必ずしも戴に見（まみ）えんや
5　何（いか）にも必ずしも戴を見るべきか

問四　王子猷の言動を評したものとして、**ふさわしくないもの**を、次の中から一つ選べ。

1　奔放不羈　　2　融通無碍　　3　自由自在

4　風流韻事　　5　豪放磊落

三　次の文章は、孟子と斉の宣王との問答である。これを読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で本文中の返り点、送り仮名を省略したところがある）。

孟子曰「臣聞之胡齕。王坐於堂上。有牽牛而過堂下者。
王見之曰『牛何之』。対曰『将以釁鐘』。王曰『舎之。吾不忍
其觳觫若、無罪而就死地』。対曰『然則廃釁鐘与』。曰『何
可廃也。以羊易之』。不識有諸[1]」。曰「有之」。曰「是心足以
王矣。百姓皆以王為愛也、臣固[a]知王之不忍也」。王曰
「然。誠有百姓者。斉国雖褊小、吾何愛一牛。即不忍其
觳觫若、無罪而就死地。故以羊易之也」。曰「王無異
於百姓之以王為愛也。以 A 易 B、彼悪[b]知之。王[2]若隠其
無罪而就死地、則牛羊何択焉」。王笑曰「是誠何心哉。
[3]我非愛其財而易之以羊也。宜乎百姓之謂我愛也」。曰

「無(カレ)レ傷(いたムコト)也。是(レ)乃(チ)仁術也。見(テ)レ牛(ヲ)未(ダ)レ見(レバ)レ羊(ヲ)也。君子之於(ケル)二禽獣(ニ)一也、見(テハ)二其(ノ)生(ヲ)一不レ忍(ビ)レ見(ルニ)二其(ノ)死(ヲ)一。聞(キテハ)二其(ノ)声(ヲ)一不レ忍(ビ)レ食(ラフニ)二其(ノ)肉(ヲ)一。[c]是以[4]君子(ハ)遠(ザクル)二庖(ほう)厨(ちゅう)(ヲ)一也(ト)」。

（『孟子』梁恵王上）

（注）
○胡齕―斉の宣王の近臣。 ○釁鐘―鐘などを鋳造したとき、いけにえを殺し、その血を塗るという呪術的な儀式。
○觳觫若―オドオドとおびえるさま。 ○百姓―多くの人々。群臣ないし民衆。 ○愛―物惜しみする。
○褊小―狭く小さい。 ○異―不思議に思う。怪しむ。 ○隠―憐れむ。同情する。
○傷―気に病む。憂える。 ○仁術―思いやりのある振る舞い。 ○庖厨―台所。調理場。

問一 傍線1について、「諸」が指している内容として最も適当なものを次の中から一つ選びなさい。

ア 王が、堂上から見おろしていたとき、堂下をいけにえの牛が通ったということ。
イ 王が、鐘を鋳造したときに動物の血を塗る儀式を実施せよと命じたということ。
ウ 王が、いけにえとして殺される動物を牛の代わりに羊にせよと命じたということ。
エ 王が、鐘を鋳造したときに動物の血を塗る残酷な儀式を中止させたということ。

問二　空欄A とB に入る最も適当な語を、それぞれ次より選びなさい。

イ　善　　ロ　低　　ハ　悪　　ニ　大　　ホ　小　　ヘ　高

A＝　　　　B＝

問三　傍線2について、孟子の主張を説明しなさい。

問四　二重傍線a～cについて、読み方をそれぞれ平仮名で書きなさい（現代仮名遣いでもよい）。

a＝　　　　b＝　　　　c＝

問五　傍線3は、「我其の財を愛みて之に易ふるに羊を以てするに非ざるなり」と読む。この読み方に従って、返り点をつけなさい（送り仮名は不要）。

我非愛其財而易之以羊也。

問六　傍線４について、王のとった行動に対して孟子がこのように言った理由を説明しなさい。

【第三講】

〔模範解答〕

一

問一　a　いえども　　b　すなわち

問二　楮樹

問三　私はどうして待つことができようか、いや、待てない。

問四　すぐに涼を取りたいことと、薬などの生活用品として役に立つこと。

二

問一　1　　**問二**　返　　**問三**　4　　**問四**　3

三

問一　ウ　　**問二**　A　ホ　　B　ニ

問三　罪もないのにいけにえとして殺されるのがかわいそうと思うならば、牛も羊も同じはずなので、宣王の判断はおかしいと主張している。

問四　a　もとより　　b　いづ〔ず〕くんぞ　　c　ここをもつ〔っ〕て

問五　我 非下愛二其 財一而 易レ之 以上羊 也

問六　実際に見た牛を哀れに思い、羊を代わりにしようとした宣王の行動は、君子が、生き物が殺されるのが我慢できないので台所を遠ざける思いやりの気持ちと同じだと考えたから。

〔現代語訳〕

一

金粟園の裏に、二十数畝の蓮池があり、水に面して庭園があり、コウゾがそこに群がって生えている。私はあずまやを置いて涼を取ろうと思った。ある人が私に勧めるには、「これ（＝コウゾ）は材木として用いることができない木で、これを伐採して松や柏を植えるのがよい」と。私が言うには、「松や柏が木陰を作るのは一番時間がかかる、私はどうして待つことができようか、いや、待てない」と。ある人が言うには、「桃や李を植えよ」と。私が言うには、「桃や李は木陰を作るには、四、五年かかるだろう。道を求めて修行をしている人のゆくえはちぎれ雲のようだ。どうしてからたちが同じところにいる（ように、私も同じところにいる）ことができようか、いや、できない。私は今すぐ木陰ができる木が欲しいだけだ」と。コウゾは材木として役には立たないが、商の丘に生える大木が（同じく役に立たないと言われているが）、この香りをかぐと悪酔いして、三日間なおらないのと同じではない。思うに、また（コウゾは）材木として用いることができるものとできないものの境界に存在するのである。材木として用いることができるのかと考えると、家の骨組に用いることのできる材木ではなく、材木として用いることができないのかと考えると、皮から紙を作ることができるし、種は薬にすることができ、絹を染めるのにも使えるし、洗顔にも仕えたりと、その用途はとてつもなく多いのである。

二

王徽之が山陰にいたとき、夜たくさん雪が降った。眠りから覚めて、部屋の戸を開け、命令して酒を注がせたところ、一面が白く明らかな様子である。よって起きてあたりをさまよい、左思の招隠詩を吟詠した。突然戴逵のことを思い出した。その時戴逵は剡山にいた。すぐに夜に小船に乗ってそこに向かう。一夜を経て到着した。門に着くと進まないで引き返した。人がその理由を尋ねると、王徽之が言うには、「私はもともと興に乗って行き、興が尽きたので帰った。どうして必ず戴逵に会わなければいけないのか、必ずしも会わなくてよい」と。

三

孟子が（斉の宣王に）言うことには、「私はこれを胡齕（＝斉の宣王の近臣）に聞いた。王が堂上に座っていた。牛を牽いて堂の下を通り過ぎる者がいた。王がこれを見て言うことには『牛はどこに行くのか』と。答えて言うには『鐘を鋳造したので、これからいけにえとしてこの牛を殺して、その血を塗る儀式がある予定です』と。王が言うには『これを（いけにえにするのは）やめよ。私は牛がオドオドとおびえていて、罪がないのに殺されるのは（かわいそうで）耐えられない』と。答えて言うには、『それならば、鐘に血を塗る儀式をやめましょうか』と。（王が）言うには『どうしてやめることができようか、いや、できない。羊を牛の代わりとせよ』と。本当にこんなことがあったのですか」と。（王が）言うには、「あった」と。（孟子が）言うには、「この心は王たる者として十分です。人民はみな王が物惜しみをしたと考えているが、私は言うまでもなく王が耐えられなかったことを理解しています」と。王が言うには「その通りだ。本当に（そう考えている）人民もいる。斉の国は狭く小さいが、私はどうして一頭の牛を惜しむだろうか、いや、惜しまない。牛がオドオドとおびえていて、罪がないのに殺されるのが耐えられないのだ。だから羊を牛の代わりにしたのだ」と。（孟子が）言うには「王よ、人民たちが王が物惜しみをしたと考えているのを不思議に思いなさいますな。小さいもの（＝羊）を大きなもの（＝牛）の代わりにしたので、彼らがどうしてこれ（＝王様がかわいそうだと思ったお考え）をわかるでしょうか、いや、わからない。王が、もし罪がないのに殺されることに同情したならば、牛と羊とどうして選べるだろうか、いや、（違いはないので）選べない」と。王が笑って言うには「本当に（あの時の私は）どういう心だったのだろうか。私は財産が惜しくて羊を牛の身代わりにしたのではないのだ。当然だなあ、人民が私が物惜しみをしたと言うのも」と。（孟子が）言うには「気に病みなさいますな。これは思いやりのある振る舞いである。牛は（実際に殺される予定の牛を）見たが羊は見ていないからである。君子は鳥や獣に対して、生きているところを見たら殺されるのを見るのは耐えられないのです。鳴き声を聞いたらその肉を食べるのは耐えられないのです。こういう理由で、君子は調理場を遠ざけるのである」と。